

を垂れたりし以后に於て、「安心」を執筆致候事とて、決して山川氏と全同なる筈無之と確信罷在候。右御諒承賜り度、何れ委曲別の機會を期し度と存候。不宣。「終」

## 安國論講要を讀みて

高 田 惠 忍

拜呈、昨日は高著立正安國論講要一部惠寄難有拜受任候。諸大家の序文、題辭等錦上花を添へし編輯者宮原氏の丹誠も赤々と紅葉の夕榮えの如くかやくもうれしく、裝禎の美、印刷の鮮明、活字の大きさ、凡てに於て第一印象頗る宜敷、宗門近時の出版物中最も出色のものト存候。先生のこれまでの著書中でも最第一と存候。手にすると同時に直ちに讀書欲にそゝられ、先づ田中居士以下の序文より相初め候、さすがに文章では居士の文白眉と存じ。唯佐藤將軍の序文に於て先生に期待する所の多大なるものあるやに相感申候。品川驛頭では序文だけ見終り、一先づカバンに入れ午前十一時廿七分

に乗り、纏て高著を取り出して車上幾山河の秋色風煙を俯觀しつゝ心眼は毎に愛讀書に注がれて、いつか湘南を過ぎて箱根をくぐり沼津に出て鈴川に達する以前すでに道元對時頼の邊まで讀過致候。寺房に入りし後も昨夜より今日午后二時までには本講全部二三二頁まで讀了仕候。興味としてはこの際全部を通讀過致度候へ共、大林閣より撰時鈔講義續稿の督促甚だ急なるものあり、爲めに高著拜讀は一往こゝにて中止せざるを得ず、何れ拙稿完了の上更に完讀相期すべくと不取敢序講、本講の讀餘感だけ申上候。小生のこの書に於て特に感じたるは宗學的氣魄の横溢といふことに候。これは先生の生涯を通じて教場に丈室に行住坐臥隨處に之を感得し得るに候へ共、特にこの書に於て毎紙その流露横溢を見る次第に候。先師先哲には之あらんも現代宗學者中、巧緻は則ちあらん、簡潔は則ちあらん、博覽は則ちあらん、而もこの宗學的氣魄に於て何人かよく吾古梅先生の馥郁清香に逐隨し得るものぞ。この点に於てよく再び○○○たらずとも、○○○たらずとも、現當を通じて先生の價値は夙に定り居ると存候。韓愈の李杜光焰萬丈長きもの吾古梅先生の宗學的氣魄に比すべしと存候。この上は何卒宗義の生粹たる開本兩鈔を筆述して先生のこの價値を増輝せられ度切望に不堪候。

次に先生の學問に對する眞卒の態度は復后生をして發奮措かざらしめ、實に尊く且有り難き極みと存候。

第三に文章の切れがよくていかにも瘤飲の下る氣分に候。是れ漢詩文の造詣深きに依る。學問文章双全の學匠たる（學者の人格は學問文章がその基本也）宗門實に巴雷先生と吾古梅先生あるのみ。吾人豈倭する者あらんや、眞を眞と語るは慢にあらす洩にあらざる也。由來講義の筆記は Yunfun を常とす、然るに今の文は講義の筆記に餘程手澤を加へられしものか、文が締つてゐて宛然筆述の文の如く、而も講義風格があり／＼と浮び出て、扱へる教義の叙述が對他的に活き／＼致居候。之をこそ靈活の妙味といはずしてはた何ぞやと存候。特に時々、處々に織り込まれたる挿話がいかにも古梅式である邊が面白く、その奥澤吟、加治氏追回詩等漢詩を三四處挿入されしは恰も造庭に當り岩の根に植えられたる根締の如き妙趣ありて到底他人の追隨を許さざる所と感歎罷在候。總じて今度の著は若き學徒がより合つて會讀して味ふに最も適せりと存候。

若夫れ教義面に於て出家發願の法國の二大疑問を立教開宗の二大規模法國に交渉せしめたる、道元對時頼、明慧對泰時と、上人對北條氏との比較のあたり國柱會方面よりヒントを得られし邊も有之べくとは存候へ共、又先生の獨特を見るべき点大に有之、特に三災七難を超科學的信仰の立場より見るべく、宇宙一大田佛觀を展開せるあたり最も得意中の得意なるべく、さすがに深しとも遂しと存じ候惟うに近時刊行せる安國論講義中の白眉なるべく候歟。

教義上の重要面として開目鈔を妙解門、本尊鈔を妙行門、安國論を安心門とする見方あるやに存居候が、それらの邊如何扱はれ居候や、或は今后に出来るに候か。尙申上度事多々有之候へ共自家の筆述におはれて心落つかず、何れ完讀、再讀の上更に申上度と存候へ共本日はこれにて惜しき筆を擱き可申候

これまでの高著天台日蓮對照論述法華經要義、本門本尊論の内容充實は勿論に候へ共、著述の体を得たるは、今次のもの最も爲れ第一と存候が如何に候哉。ほんの粗雜なる讀余感のみ如斯奉得貴意候

敬 具

立正安國論講要刊行の翌日

芙蓉山房 高田 惠 忍

清水 龍 山 先生

侍史